
ドラゴン・スピリット

カボチャいも子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラゴン・スピリット

【Nコード】

N1396Y

【作者名】

カボチャいも子

【あらすじ】

2つの国が対立していたある時代、『未来』という組織に暮らしていた少年の成長と、戦いのお話です

どこかの地下は、（前書き）

めっちゃマイペースに更新です。

受験生なので、もう時期、停滞してしまうと思います。
受験が終わったら、もっと本格的に取り組みたいと思っています。

どこかの地下は、

地上からの光が全く届くことのない地下室。そこでは、目に映るのは果てしない暗闇で、昼なのか夜なのかも全くわからない。

男は手足に鎖をつけられて、暗闇の中うなだれていた。

すると、闇の中に小さな音が聞こえてくる。コツコツコツコツと。音とともに小さな光が近づいてきた。やがて大きくなり、牢の前に一人の男が現れた。白衣を着た細身のその男は、手にしたランプを揺らし、口元に怪しげな笑みを浮かべ、牢の男に言った。

「どうですか。気は変わりましたか。」

白衣の男がかざしたランプの光に牢の男は目を細め、何も答えなかった。

「：そうですか。やはり、あなたは協力するつもりはないのですね」
白衣の男は見下すように冷たく笑った。

牢の男は、目を細めたまま相手を睨んだ。

「私には、お前たちの利用できる情報などない」

「ふふふ：どうでしょうか。こちらとしてもこの十三年間、何も動かないでいたわけではありませんからね。：見つけましたよ。ふふふ：まったくすばらしい血ですね」

牢屋の男は、顔を上げた。その目は恐怖で大きく見開かれ、今の態度が嘘に思えるほどだった。

「：な、なんのことだ」

男は立ち上がりとしたが、手足に絡まる鎖はそれを許さず、動く度に、鎖で傷ついた体から血が流れた。ただ金属音がむなしく響いた。

「血ですよ。特別な血：まあ、あなたには、もう関係のないことかもしれないがね」

男は、もがき苦しむ牢を嘲笑い、白衣を翻した。

「ま、待て！：やめろ。やめてくれ！」

牢の男は、まわりつく鎖ごと体を引きずり、立ち去る男にすぎた。

しかし、白衣の男はランプを揺らしながら歩き出した。地下はまた、コツコツコツという足音を飲み込みながら、暗黒の世界へと戻った。

昼下がりの、特別施設『未来』第一塔の展望台屋上の手すりに腰を下ろした少年は、吹き抜ける風を心地よく感じている。風は、少年の赤色がかった髪を撫でるように吹いていた。手を離せば落ちてしまうような、そんな強い風が吹いている。少年の眼下に広がる景色は、いつもと変わらぬ町だった。

入り込み、高さも秩序はない建物が密集している。大きな屋根の上に、昼寝をしている猫の姿が見えた。その近くでは、子供たちが走り回っている。

少年は、この赤の町が大好きだった。

「空大。こんなところにいたのかよ」

「そだよ。探したんだから」

空大は、手すりの上に立ち、後ろを振り返った。

「おう。弾、悠。わりいな。」

「わっ。そんなところに立ったら落ちちゃうってば」

「ちょっと待って。展望台一週してくる」

風が音を立てて吹きすさぶ中、空大は跳ねるように手すりを歩き出した。

「…落ちないでよね」

悠は、見てられないとばかりに、半ば叫びながら空大を目で追う。

「ははは。ほんと、お前って人間ばなれな度胸だな」

弾は、飄々と命綱無しで手すりを歩く空大と、それに縮み上がっている悠を見て陽気に笑った。

「よつと…お待たせ」

悠の心配もよそに、空大はほんの数分で屋上を一周して戻ってきた。
「ほら、次は、大五郎じいちゃんの授業だ。遅れるとまた何か言われっぞ」

弾と悠は二人で目をあわせて呆れて言った。

「早くって…お前を待ってたんだよ」

「もう！それなら、こんな屋上なんて来ないでよね」

三人は階段へ向かい、大五郎の元へ歩き出した。

ある日の森の前で

森の近くの大きな湖のほとりに、一人の老人がいる。

束ねられた白髪が風にふわりとなびきながら、髪と同じ色のひげが顔を覆っている。

老人は、太陽の光を浴びて白く反射している湖面を眩しそうに見つめていた。

湖の反対側には二本の巨大な塔が並んでいる。

その塔から、数人の子供が湖岸にそって歩いているのが列になっていた。

子供たちは無邪気に笑ったり話したりしながら、老人の近くまでやって来た。

「こんにちは。大五郎先生」その中でも年長に見られる少年が言った。

大五郎はゆっくり立ち上がった。

「やあ。諸君」大五郎は子供たちを見回す。

子供たちはこれから何をするのだろうと、好奇心いっぱい目で大五郎を見つめている。

「おや…、三人ほどいないのう。…まあ、よい。先に始めるとしようかの…しかしじゃ、ここは湖岸で石ころばかりじゃ。…わしも、もう年じゃてのう…、このようなゴツゴツした石に座っていると…どうも少しお尻が痛くなつての……すまんが、もう少し後ろにある草原で話をしようではないか」

一同はそうして草の上へ移動した。

そのころ、空大、弾、悠は、塔一階にいた。

「…はあ…わたし…、こんなに…、速く…、階段…降りたこと、…ない」

「何いつてるんだよ。悠がビリだったじゃん」

息切れして前のめりになっている悠に空大がそっけなく言った。

「いや：それでも：下りでも、階段を一気に走ってきたんだ。：俺だってキツイよ…」

弾も、悠ほどではないが息を切らしている。

一同は、屋上から階段で降りてきたのだった。

「もう：どうして、大人は、：エレ、：ベーター、使っても、いいのに：わたし、足が腹筋みたいな筋肉だったら、：十個くらい割れてるかも…」悠が足をさすって言った。

「いやいや：お前の足には、どうみても筋肉の、き、もねえよ：それよりさ、俺たち急がないと：ほら、あのおっさん、俺たちのこと睨んでるぜ」

空大が目をやって言った。

一階の広間で数人の大人たちがこちらを見ている。

「ほんとだ、やばい。：しかしだな：空大、俺はお前と十年の付き合いだが：お前が息切れしたのを：見たことがない気がする…」

三人ははや歩きで玄関へ向かった。

背中に大人たちの、早く行きなさいという刺々しい視線を感じながら。

一階には正面玄関の前には未来塔の飼育下にある犬のポンがいる。

「じゃあな、ポン。」空大はポンの頭を軽く撫でた。

ポンは地面に這いつくばった状態で軽く尻尾を降っただけだった。

三人は玄関を出て湖の対岸へ向かった。

憧れ

「遅れてすみません」

三人が、到着したときには、他の子供は全員集合し終えていた。

「ほっほ。弾、悠、君たちの遅刻はのう…その空大をお迎えにでも
いってくれてたんじゃろう。ほっほほ。」

大五朗がにこやかに言うのと、周りの子供たちも空大を見て、くすくす笑った。

「うっせ。」

中には、空大を指差して笑う小さな子供もいた。

「普段はいつも、未来塔の図書室でわしの昔話ばかり聞いていても
のう、せっかく自然にめぐまれた環境に暮らしておるのじゃ。こう
して外へ出て、湖の風に当たりながら、草の上で話をするのもいい
ことではないか。のう？ 祐次」

さきほど、空大を指差して笑っていた少年が、笑顔でうなずいた。

「うむ。では、…」

そういつて、大五朗は襟元から首に掛けられていた笛をとりだした。

「君たちに紹介したい者がいるので、呼んでみせよう」

大きく息を吸い、大五朗の笛がピューッと鳴る。

「ねえ、空大、驕…音だけで、何もないくない？」悠が二人に小さくささやく。

「うん。確かに」驕がつぶやいた。

そのとき突然、森がざわめきだした。

草木が、今までとは全く違う揺れ方をし始め、しだいに静まり返っていく。

木々が左右に揺れ、まるで踊っているかのようだ。

いつもと違う森の雰囲気、どうしたんだろうと子供たちが不安げにざわめきだした。

空大はそのとき、耳を研ぎ澄ませていた。

目を閉じて、森から流れてくる風に意識を傾けながら、森を感じていた。

何か、風が走っている、そんな感じがする。

「あつ、何かくる」ふと、空大がある一点を指差した。

そういったものの、数分間は沈黙が続いていた。

そして静寂ののち、空大が指差した方から、バサツーンという音とともに、木々を突き抜けて巨大な生物が空に現れた。

空大たちのいる場所からは、逆光で黒くて姿がはっきりしないが、四本の足をもっている。

とても大きな生き物だった。

その生き物は、羽ばたきながらこちらへ近づいてきた。だんだん近づくにつれて、羽音が大きく響くき、その生き物は人を乗せているように見える。

「ほらっ、どうどう！よしっ、そこへ着地だ」

着地した生き物の背から、男が一人降りて近づいてきた。

茶色の短髪で、背丈は高く、そしてがっちりとした男だった。

すると、大五朗が両手を広げて彼を迎えた。

「やあ、天治。すばらしい乗りこなしじゃった。わしも惚れ惚れしてしまったよ。ほっほっほ。そのグリフィンの様子はどうじゃ。もう発情期は終わったのかのう？」

「ありがとうございます。大五朗先生。そのことなんです、こいつはまだ子供なんで、こうして乗り込みはできるので大丈夫ですが、成体となると、暴れて俺でも手に負えませんでした。もう少し

で右腕を持ってかれるところでしたよ」

「なるほど。これからの季節が大変になってくるのう。彼らの飼育舎も用意せねばならん。：おう、それでじゃ、今日こうしてここに来て貰ったのは子供たちに君を紹介したいのじゃ」

大五朗は空大たちに振り返った。

「諸君、このおじ・・・いかんいかん、この若々しい青年は、天治。天治先生じゃ。彼はしばらく前に、約10年間のある任務から帰還したんじゃ。わしら『未来』のエリートじゃよ。そしてじゃ、彼には皆に自然学の教師となってもらうつもりじゃ。ほれっ、天治、この子達に挨拶してくれ」

天治が前に出た。

「はじめまして、俺の名前は天治^{てんじ}。話の通り、ここ五年間は野暮用があつて未来塔にいなかったんだが、最近ここに帰ってきたんだ。今日から君たちの一教師としてよろしくたのむよ。年は27歳。趣味は、武道だ。」

「彼は、かつて軍に所属しておったのじゃ。一流の武道家でもあり、自然学にも精通しておる。本日はこの森に住むグリフィンで登場してもらったんでう。まさに文武両道じゃ。皆も見習ってほしいのう。：さて、こうしちやおれん、わしは少し用事ができたんでう。すまんが、これで失敬。それでは天治、彼らに授業をしてやってくれのう」

大五朗がそう言い、天治は軽くお辞儀をして彼を見送った。

「ねえね、グリフィンだよ。すごいね！わたし見たの初めて！」悠がグリフィンを指差していった。

「ああ、俺も初めて見た。図書館の生物図鑑のなあ：最後のページだったけ？みんなが見たがってぼろぼろになった写真でしか見たことなかったけど、まさか未来塔の森にいたんだな」

驕も声を弾ませて答えた。

「ねえ、空大もそう思わない？」

「…ん、んああ！確かに！俺もあんなの始めてみるよ。結構自分でも、森のことは探検したつもりだったんだけどなあ…」

空大は、グリフィンに見とれていた。

先ほど感じた、風の感じ…あれはこのグリフィンのものだったのか…確か、大五朗と天治の話では、このグリフィンは子供だといった。

大人だったらどれほど大きいのだろう。

あの翼で風を切って大空を舞う姿はさぞ雄雄しいのだろう。

ワシや隼よりも、ずっとずっと早く空を駆けるのだろう。

風の中を自在に行くグリフィンの姿が、空大の脳裏に浮かび上がった。

憧れが、自分の心で湧き上がるのを実感した。

「…悠、こいつ、あのグリフィンに一目惚れしたんだと思うよ」

驕が、一方向を見つめて動かない空大を指差した。

「うん。わたしもそう思う。空大の初恋…グリフィンだね」

「よしっ、まずはお前たちにこいつを紹介しよう。知っている子もいると思うが、グリフィンだ。顔はワシのような鋭い嘴、背中にはどの鳥にも負けない力強い翼、胴は羽毛ではなくて体毛でずっしりしてるんだ。

そして、その巨体を支えるためにあるこのごっつい前足、後ろ足。ちなみに後ろ足は鱗に覆われていて鳥足のようになってる。

今までにこの森でグリフィンを見たことある者はいるか」

空大たちはお互いを見回したが、誰も手を上げるものはいなかった。

「そうか、うん。まあ最もだよ。なぜってこいつらがやってきたのは、俺がここに帰ってきた時だからだ。じゃあ、別の質問をしよう！

グリフィンの天敵はなんだ？分かる者はいるか：おっ、その少年、言ってみな」

天治が指を指した。後ろにいた少年が手を挙げていた。年は空大と同じくらいのように見える。

こほん、と咳払いを一つして、メガネの位置を直しながらその少年が答える。

「ええっと、ガジュラです。」

「正解だ。ではガジュラの別名を知っているものは？」

間髪を入れず先ほどの少年がまた手を挙げた。

「こほんっ、ガジュラの別名は”空飛ぶ芋虫”です。」

まるで、こんな問題、解けて当たり前といった様子だった。

周りの子供たちが、関心の声をあげた。

「すっげー。」

「空大とはまるつきし、きっちりかつちりきれいに完全反対タイプかもしれないね」

「うるっせ」

悠が空大をからかった。

「正解だ。：君は秀才だな。名前はなんて言うんだい？」

「大吉です。どうぞ、よろしくお願いします」

天治は頷いた。

「ガジュラは羽の生えた巨大な：ムカデのような生き物だ。時には人を食ったりもする危険生物だ。：おっ安心しな！この森にはいいよ。あいつらはこの土壌では生きていけないんだ。

やつらには、ガジュ気っていうガスが必要で、そのガジュ気つてのがうちの敷地にはないわけだ。ちなみにガジュ気は人にも有害で気をつけなければならない。10分もすると気分が悪くなって、ばたんきゅーだからね。さて、ガジュラは、ここらで置いておいて、このグリフィンについてだが、こいつはまだ子供なんだ。名前はビッ

チっていう。グリフィンってのは、賢い生き物で人間を選ぶんだ。特に野生の大人のグリフィンだと、気の合う人間なんてそういるもんじゃない。だけど、この子は子供の頃から、俺たち人間と接してきたから割と人懐っこい。…おーい、そこのちびっ子、近づいたらダメだからな！」

祐次が驚いて、振り返った。輪を抜けてビッチに近づこうとしていたところだったのだ。

「先に説明してなかった俺も悪いんだが、グリフィンもガジュラと同様に危険な生き物だ。なあに、人を食ったりするわけではないんだが、見てみろ！あの巨体。子供ですらあの大きさなんだから、人が下手に手を出すもんじゃない。確かにビッチのことを、さっきは人懐っこいと言ったが、いいか、俺の指示がない限り、勝手に近づくのはよしてくれ。」

祐次は不機嫌そうな顔をして、背の高い子供たちの間にまぎれ、隠れた。

「…ふう、よし。今日はこれまでだ！初回だから早めに切り上げよう。あと、宿題として、森の生き物について、何かひとつレポートを提出するように！図書室、資料館、インタビュー、何をしてもいいから、とにかく一つ生き物を取り上げてまとめてくるように！あっ、でも、森へは入らないように！これから、グリフィンを始め、何種もの生き物が発情期を迎えるから、むやみに森へ踏み込むと、大変な目に会うからな！一応、…この中に寮長はいるのかな？厳しく注意しておいてくれよ。特に、いたずらずきのちびっ子には目を光らせてくれ。俺も、見回りしているからさ」

その日夜、食堂で三人は天治の授業の話をしていた。

「いやあー、しかし、今日は楽しかった…」

空大が、上の空でつぶやいてスープをすすった。

「空大、ビッチに惚れちゃったんじゃないの？」

「うん。あんな空大見たことないな。俺たちは、君の初恋を応援するぜ！」 驒が笑っていった。

すると近くのテーブルに、小さな少年と、空大たちよりすこし年長に見える少年が話をしていた。

「おっ、寮長の秀だ。…注意しているみたいだな。なんのことだか、だいたいは想像がつくが…」

「へっ、ざまあみな。あの祐次とかいうガキ、天治の授業の時、俺のこと笑ったんだ」空大が驒の見ている方へ目を向けていった。

「もうっ。あの子は確か6歳だよ。空大、どれくらい年が離れているのかわかっているの？」

「まあまあ、確かにあの子は6歳、空大は13歳で結構離れてるけどさ、悠は知らないと思うけど、あの子、結構いたずらっ子で男子寮では有名なんだ」

驒が悠をなだめる。

「そうだ、悠！ お前は知らないだろうがよ、さっき、あいつが女子寮こっそり入り込もうとしていたのを阻止してやったんだ！ なあ驒！ 俺たち、案外女子のピンチを救うヒーローなんだぜ？」

「…でも、それじゃあ、あんたたちも女子寮の前にいたってことでしょ？」

驒が悠と空大の間に気まずそうな顔で立っている。

暖かいスープが冷え切ってしまいそうな雰囲気だった。

「…ふんっ。そんなの関係ねえ。俺は結局はヒーローだ！ 見てみな、この戦利品」

そう言って空大が堂々とトレーナーの袖をまくった。

腕にはくつきりと小さな歯型がついている。

「…はあ…、まあ、確かに、女子の危機をすくってくれたのはどうも…ごくろうさま」
悠は呆れながらつぶやいた。

ナシナの実

深い深い森を歩いていった。

木々が完全に生い茂って何の光もない。

そして、生き物たちがいるのだろうか、そう疑問に思うほど、静か過ぎる。

ただ、歩くたびに自分が草を踏みしめる音と、自分の呼吸しか聞こえない。

まるで、森の生物は自分しかいないのではないか、と思うくらいだ。ここが、森のどこか分らない。

だけど、見えていた。そして、どこへ向かっているのかも分かっていた。

森の中、誰も知らないような場所へ行くのだ。

あの建物だ。

そしていつもそこが見えた瞬間、夢は終わるのだった。

「今何時だろ…」

未来塔第一塔のとある男子寮で空大は布団の中で目を開けた。

すぐそばのカーテンがうすいピンク色に染まっている。

「…朝か。…変な夢だった」

布団から出て寝巻きから普段着のTシャツとゆったりとしたズボンに着替え、カーテンのすきまから外をのぞいた。

すぐ下には湖、そしてそれを囲むように森が続いている。

太陽が少し出てきて、黄色くなりかけていた。

あの森の中に、夢の続きがあるのだろうか…。ここ何日もあの夢だった。

何かあるのか…そう思い、寢室を振り返る。

空大と同じ位の年の少年たちが寝室に散在していた。

：すごく、すごく、むさくるしい。なんでこんなに寝相が悪いのか。どうすれば、部屋の右端にいたやつが、左端に行くんだろうか。

あいつなんて壁に倒立しながら寝てる：怪物かよ。ああ、あれは銀二か。

驕のやつ、どこだ。

おっ：、あいつ、服を着ていないではないか。

いや、昨日たしかあいつはちゃんと寝巻を着ていたが：

空大は、仲間の無邪気な姿を見ると、夢なんて少しも気にならなくなった。

第一、この俺がそんな夢ごときで恐れるのは自分でもどうかと思う。悠にだって、また馬鹿にされるだろう。

空大は、そう考え直して、自分の布団をたたみ、寮を出て、そして湖へむかった。

ツーン：

「夏ナシナが焼ける臭いだ！」

かすかに、甘くそして何か焦げ付くような香りがする。

空大は自分の鼻を研ぎ澄ました。

ナシナは数年に一度、水底に根をはり少しずつ成長する木だ。

ナシナには幹に実をつくり、木々の成長とともに水中から空気に触れ、太陽の光を浴びると実は完熟し、独特の果実の香りを放つのだ。味はとても良いのだが、数年に一度しか実をつけないので、とても希少なのだ。

どこだろうか、ととりあえず湖面を一周走って探すことにした。

うす明るい朝のランニングは、寝起きの肌にひやりとした風がぶつかって気持ちがいいものだった。

息が上がっても、まだもつと速くと、走り続けた。

まだ何も見えてこないが、間違いなくナシナの香りはしている。しばらく走っていると

遠くに、水面から少し顔を出している木がある。

空大は、そこへ向かって走った。

湖岸から、十メートルほど沖の方にナシナの木があった。

普通の木と比べると、一回りほど小さいが、実はしっかりとて、成人の頭ほどの大きさで、うすい赤色っぽいものと、赤または茶色っぽい色の実が6個ぐらいあった。

ナシナの実は湖の養分で成長し、十分に熟れて赤色になり、日光を浴びると焼けて茶色になるのだ。

「食べごろだ。」

空大は、服を脱ぎ捨て、水に入った。

さすがに、寝起きなので、湖の冷たさに少しうめいたが、少しすれば慣れてきたのでナシナの木に向かって泳ぎ始めた。

水中に浸かった部分が、空気に触れるとヒヤッとして、眠気がふつとぶ。

走って火照った体が、冷たさで中和されていくようだった。

だんだん近づいていくと、ナシナの香りが強くなってき、それもまた空大には魅力的だった。

いつだったか空大が、ナシナの実を始めて口にしたのは、彼が4歳の頃だ。

昔よく散歩に連れて行ってもらった英瑚という老人とだった。

ナシナの実は、きれいな水にしかない、未来塔の森も湖も、空も、ここの自然はどこよりもきれいなのだと、そう言っていた。

あれ以来、ずっとナシナを探し続けてたけど、今日ようやく見つけた。

空大はナシナの幹に捕まってその中から茶色の一つをもぎとった。熟れて、ちょうどいいころだったので少しひっぱるだけで簡単に取れた。

実を抱えて、木にのぼり、大きめの枝に腰かけ朝日を見つめた。一口実をかじった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1396y/>

ドラゴン・スピリット

2011年11月18日04時53分発行